

された。

現状で、肺高分解能 CT 画像は肺組織のルーベ像レベルの描出能を示し、肺瀰漫性陰影の検討に大きな情報を与えると考えられた。

9) 大腿骨骨折後の肺脂肪塞栓の1例

湯川 貴男・佐藤 敏輝 (厚生連中央総合
病院放射線科)
原 敬治
益子 和徳 (同 麻酔科)

右大腿骨骨折後に生じた肺脂肪塞栓の1例を報告した。症例は19才男性。平成3年6月5日バイクで転倒して受傷、右大腿骨を骨折した。救急外来受診時には胸痛、呼吸困難を訴えていた。検査データでは、貧血、白血球増多、GOT、GPT、LDH、CPK 上昇、 P_{aO_2} 低下を認めた。胸部単純写真では両側上肺野を中心とした広範な浸潤影を呈し、同部は CT で区域性分布をしない末梢を中心とした肺泡性病変であった。以上から肺脂肪塞栓と診断しステロイド等を投与したところ、2日後には改善した。

肺脂肪塞栓は長管骨骨折後の重篤な合併症となりうるため、症状等から疑われたら速やかに対処すべきである。

10) 結節性動脈周囲炎 (PN) の血管病変

三浦 努・山岸 広明
木村 元政・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

結節性動脈周囲炎は、全身の中小動脈に多発する非連続性、分節状の繊維素様壊死を特徴とした壊死性血管炎をいう。鑑別疾患として、結節性動脈周囲炎以外の膠原病や皮膚型結節性動脈周囲炎などがあげられる。

我々は、3例の結節性動脈周囲炎の症例について、血管造影の所見をえることができ、これについて若干の考察を加え報告した。

3例の初発症状は皮膚症状であり、皮膚生検にて壊死性血管炎が認められた。1例は診断基準の多くを満たし、血管造影上、末梢動脈での途絶や狭小化が認められた。

1例では、血管造影上特異的と考えられている微小動脈瘤を認め、他の1例では、微小動脈瘤は認められなかったが、腎動脈その他に系統的に、中小動脈の蛇行、径の不整、分枝異常など血管炎の所見が認められた。

11) 外傷後約1カ月を経て発症した小児十二指腸壁内血腫の1例

川崎 俊彦・古沢 哲哉 (長岡赤十字病院)
放射線科
清野 泰之
松田由紀夫 (同 小児外科)

腹部鈍的外傷後約1カ月を経て発症した10才男子の十二指腸壁内血腫の1例を報告した。右季肋部痛を主訴とし、嘔気・嘔吐で発症。約1カ月前自転車で転倒し、腹部を打撲した既往があった。入院時37.9℃の発熱があり、上腹部の自転車転倒の痕跡と、右上腹部の圧痛を認めた。検査成績では白血球増加とALP・AMYの上昇を認めた。腹部超音波では胃から十二指腸下行脚付近の著名な拡張を、DICでは十二指腸内側壁に沿って広がる造影剤を認め、上部消化管造影では十二指腸下行脚から水平脚に半球状の圧排・狭窄像を、腹部CTでは同部に直径約7cm大の嚢泡状腫瘤を認め、十二指腸壁内血腫と診断した。その成因について若干の文献的考察を行い、発症までに約1カ月を要した理由について推論した。

12) 動注リザーバーからの肝CT-Arteriographyの経験

関 裕史・塩谷 淳 (新潟県立中央病院)
放射線科
内藤 彰・畠山 重秋 (同 内科)
長谷川正樹・高木健太郎 (同 外科)

動注リザーバーからの肝CT-Arteriography (CTA) について報告した。CTAは外来で繰り返し施行でき、単純・造影CTでは描出できない病変を検出し得ることから、治療効果の判定や経時的变化の把握に優れている。また、動注抗癌剤の肝内分布の評価・推定に役立ち、動注リザーバーからのDSAとの対比でextrahepatic perfusionもチェックできる。肝動脈分岐型式、門脈枝閉塞による肝動脈血流の増加、hypervascular tumorによるサイフォン効果など肝動脈灌流様式に影響するいくつかの要因があり、これを把握することがCTAの診断に大切である。